

太鼓名と詩、諺、コンピュータの論理

■太鼓言語の伝達力

植民地時代、トーキング・ドラムによる情報伝達は、往々白人たちを出し抜いた。例えば、1887年にスタンレーがコンゴ川を下った時、行く先々にはすでに触れが回っていた。それゆえ、太鼓言葉は往々神秘化され、瞬く間に数十マイルも先に届くなどと誇張して語られてきた。だが、太鼓音の到達範囲は、条件の良い川沿いの土地の朝夕でも10km程度が実情らしい。

また、アフリカ西部・中央部のトーキング・ドラム地帯でも、声調言語を話さない人々の間には太鼓言葉も存在しない。しかも、太鼓言葉を用いる人間集団は概して小さい。太鼓言葉は声調の高低の2項対立に基づいて、各単語（動詞では肯定形・疑問形など）の固定した声調パターンだけを写し取る。だから方言でも、語の声調パターンが異なる太鼓言葉は聞き分けられない——事情は違うが、関西と関東の方言差が参考になる。複数の太鼓言葉（方言）を解する人も多くはなかったし、村のトーキング・ドラムの傍らに常時鼓手がいる慣行はなく、人々は自分自身の関心に応じて、随時太鼓を打っていた。だから、情報が次々にリレーされて遠方に届くのはごく限られた場合だった。

ただ、多くの声調言語が属するバントゥ語群には、東アフリカのスワヒリ語やその西隣のリンガラ語のような、リング・フランカも存在する。もしもこの2言語が声調言語だったら、太鼓言語がアフリカ大陸中央部を東から西に貫く有力な通信手段になっていただろう、と想像してみるのは楽しい。とはいえ、両言語も元は声調言語だったかどうか知らないが、共に交易言語だ。声調言語が交易を通じて広まる場合、当初重要だった声調の機能が無意味化する傾きがあるらしい。その一例が、西アフリカのマンデ

インゴ語である。[Carrington, J. F. *Talking Drums of Africa*, 1949]。すると、上の想像は、二兎を追う、元から叶わぬ夢ということになる。

■太鼓とコンピュータ

前回、木村論文から、あたかも落語の「寿限無寿限無…」を思わせるポンガンドの太鼓名を紹介した。実は、この例が暗示する通り、太鼓言葉には伝達の速度や効率、あるいは通用範囲を制限する構造要因が内在する。

太鼓言語では、個人名に限らず、あらゆる単語が必然的に長くなる。それは、太鼓言葉が各単語の音節ごとの声調の高低択一のみを音として映す制約のゆえだ。例えば、2音節の語なら、どれも高高／高低／低高／低低のいずれかの音の組み合わせとして表現される。つまり、n音節の単語は2ⁿの声調パターンに振り分けられるに過ぎないので、その結果、「同音異義語」が音節数に反比例して多くなる。2音節語なら、少なくとも数百は下るまい。

そこで、太鼓言葉では、「同音異義語」を区別するために長々とした修飾が各語に施される。この事情は、いわば、2進法のコンピュータ言語では、10進法の小さな数が幾桁もの大きな数として表記される事情を連想させよう。

ここで、コンゴのキサンガニ（スタンレービル）の辺りに住む赤道バントゥ語系のロケレ人（ケレ語）の例を引こう——便宜上、開母音・閉母音の区別を表記しない。まず、口語では「高高」の声調パターンをもつ2音節語の中でも、事情が単純な名詞から *songe*（月）、*koko*（鳥）、*fele*（魚の一種）を選んでみよう。これらの太鼓言葉は、それぞれ *songe li tange la manga*（月が大地を見下ろす）、*koko olongo la bokiokio*（あの鳥、小さくてkiokioと鳴く奴）、

yafele la yamboku (全てのfele魚と全てのmboku魚)となり、太鼓音は「高高低高低低低低」、「高高低高低低高低低」、「低高高低低高低」と打たれる [Carrington, *ibid.*]

次に、「低低低」の声調パターンをもつ3音節の名詞、*lomata* (マニオク)、*likondo* (料理バナナ)、*likolo* (上方)を取り上げよう。これらの太鼓言葉は、各々*lomala olikala la kondo* (マニオクが荒れ果てた菜園に残っている)、*likondo libotumbela* ([熟れると] 支柱で支えられる料理バナナ)、*kikolo ko nda use* (空の上方で) となり、太鼓は「低低低低高低低低高低」、「低低低低高低低」、「低低低低高高低」の声調で打たれる [*ibid.*]

■詩、諺、重複、侮蔑

木村は、太鼓名について、その冗長さだけでなく、詩的で意味が取りにくい点と、諺が組み込まれている点を指摘した [木村大治「ボンガンダにおける個人名」『アジアアフリカ言語文化研究』52、1996]。キャリントンも、ケレ語の例を引いて同様の見解を表明している。

例えば、少女は太鼓言葉では、「あの娘は漁網の所には行かないだろう」という文になる。これは、或る漁網が男性に限られるロケレの性的分業規範を映す。また、呪医は「あの呪医、ライオン、踊りのエレキタ」となる。ライオンは呪医の力、踊りは呪医の仕事内容への言及だ——エレキタは意味不明。戦争の太鼓言葉が「戦争は好機を窺っている」という意味の文であるのは、中央コンゴでは不意打ちが最も重要な戦略の一つだからだ [Carrington, *ibid.*]

キャリントンは、これに加えて、重複や侮蔑という要素も指摘している。先に挙げた、fele魚が太鼓言葉では*yafele la yamboku* (全てのfele魚と全てのmboku魚)となるのが重複の一例だが、小魚はさらに*yafele la yamboku ya otomali wa lio* (女性たちの全てのfele魚と全てのmboku魚)となる。また、死体は「大地に土塊を背に横たわる死体」と、回りくどく表現さ

れる。侮蔑の例を挙げれば、山羊は「村のちっぽけな山羊」となり、ロケレの近隣民族フォーマでも「馬鹿の息子の山羊」と表現する [*ibid.*]

木村もキャリントンも、詩、諺、重複、侮蔑などの要素の存在理由には言及しない。私は、高低の声調の二項対立による2"の声調パターンへの振り分けの単純さを補うべく、あらゆる連想作用が総動員されているのだと考える。

■口頭の名前と太鼓名

では、個人名とその太鼓名の間にも連想関係があるのだろうか。キャリントンによると、キサンガニ地域のロケレ以外の民族では、太鼓名の冒頭の一語が個人名として口頭で使われる。例えば、メネオケンゲ(主)という[バ]ムボレ人の太鼓名は、*Meneokenge la yeto ya ilondo, kumi la kikanda lya yaatelia, bokana wa yaolonga lionga* (輸入りの剣をもった町の主、Yaateliaと呼ばれる土地の長老、母の所在の町はYaollonge)なのである [*ibid.*]

では、ロケレ人の場合はどうか。キャリントンが集めた事例を見てみよう。ミッションの地方学校の教師ボティコティコの太鼓名(の意味)は、「この強壯な男はまだ戦闘に送り出されていない」、スタンレービルの医療助手のワウイナは、「この誇り高い男は決して忠告をいれない」であった。別の医療助手ロティカは、「この子供は父も母もなく、土地の会話小屋で供される食物を待ち受けている」。また、「黒い肌は全てのものゆえ、黒い肌を笑うな」がキャリントンの使用人、ポフォモの太鼓名だった。

この4例の内、口頭の個人名と太鼓による個人名の間にも連想関係が見られるのは、ケレ語で孤児を意味するロティカの場合だけだという。つまり、ロケレでは一般には両者の間には連想関係が見られない [*ibid.*]

それは、太鼓名を祖先から受け継ぐからである。一方、口頭の名前は、そうとは少しも限らない。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)